

ているが、まさに復活の問題にこそ中世哲学の諸問題が集約化されているといっても決して不当ではあるまい。本書は個々の問題についてみても、例えば当代における聖書解釈に対する言及 (SS. 188 sqq.) 等、きわめて興味深い研究を多々含んでいるが、本稿においてふれた以外にも、トマスにおける *anima* の *Weiterexistenz* の解釈 (SS. 146sqq.) が、*esse* と *essentia* との *Realdistinktion* をいわば自明のこととしてなされているなど、必ずしもすべてにわたって説得的ではなく問題を含んでいる。今後、著者自身も自認している *Anhang* に収録されている未刊資料のテキストクリティークの問題はいうまでもなく、言及されている諸問題の個々細部にわたる検討が必要だといえる。なお本書は索引を欠いており、広範にわたる研究であるだけに、せめて人名索引だけでもあればとおしまれてならない。

---

### Martin Bauer : Die Erkenntnislehre und der *conceptus entis* nach vier Spätschriften des Johannes Gerson.

(Verlag Anton Hain·Meisenheim am Glan 1973;  
MONOGRAPHIEN ZUR PHILOSOPHISCHEN  
FORSCHUNG Bd. 117)

坂 本 堯

1973年、Dr. Martin Bauer は、総ページ519頁に達する上記の学術論文を出版した。著者は西ドイツのケルン大学トマス研究所に所属する学者であって、現在、ドイツにあるアリストテレスの写本研究に当たっている。

著者はこの論文で、J. Gerson (1363–1429) の後期哲学書 *Centilogium de conceptibus*; *Centilogium de causa finali*; *De modis significandi*; *De concordia metaphysicae cum logica* を分析してその認識論や形而上学を明らかにしている。

ところで、ここでは、この中から J. Gerson と Cusanus との関連を明らかにした点を紹介して、この論文の価値を指摘することにした。

まず、“*Centilogium de conceptibus*” においては感覚から表象 (*conceptio*) が形成されるについての J. Gerson の考えが明らかになるが、これが Cusanus のそれと似ているのである。

感覚的に知覚されたものと、その表象との間には一定の表象関係が存在しているにもかかわらず、表象 (signum significans 本書42頁) は、抽象作用によって対象から引き出されるものではなく、知性によって自由に創られるのである。

次に“Centilogium de causa finali”における J. Gerson の真理概念は Cusanus のそれに極めて近い。(本書215頁, 470頁)

J. Gerson は、真理を、まず、神の不変の属性で、神の名となりうるものであるとし、その根拠をヨハネ福音書 (14の6) “Ego sum via, vita, veritas” におく。しかし、また、真理は事物と知性の間の適応性 (aptitudo 本書10頁) として規定されている。

ところで、J. Gerson によると、人間の認識は直接に事物を対象としていない。換言すれば、事物は認識行為の外に存在している。人間の認識作用が直接に対象としているのは、人間の認識能力によって創られた像 (Bild) なのである。従って、人間の認識は物自体の認識ではなく、事物の像についての認識であるにすぎない。この結果、人間は物自体の認識は持つことが出来ず、ただ、それに近似していくに過ぎない (本書216頁)。この真理に無限に近似していく人間の真理認識の考えは Cusanus にも明らかである (『知ある無知』I巻3章)。また、真理そのものを、Cusanus は永遠に不変なものとして教えている (『叡知の探究について』36章)。

ところで、真理概念の考察にあつて、本書は、J. Gerson と Cusanus の相違をも考慮すべきであった。Cusanus の「知ある無知」の理念による認識批判は、多くの無限についての数学的考察を伴っている。そこから、“coincidentia oppositorum” (対立物の一致) の原理が生れたのであった。

次に“De concordia metaphysicae cum logica”においては、神と被造物の間にある関係が問題となり、これが Cusanus と J. Gerson との類似性を示すこととなるのである (本書354頁)。

ここで、J. Gerson は、あらゆる存在物が“esse objectale” (知性の対象となる存在) として、神の“みことば” (divinum verbum) のなかに存在していることを主張している。しかし、これは哲学によってではなく聖書によって確認されるのである (本書493頁)。

このような考えを Cusanus は、“De idiota de mente” の第3章において、すべ

ての事物は厳密な意味で神においてのみ認識され、神のなかに存在しているとして、述べているが、このような考察はすでに『知ある無知』のなかにあっても明らかで、このような点から、Cusanus は、すでに、Johannes Wenck より Pantheista (汎神論者) として非難され、それに答えなければならなかったのである。

Cusanus によれば、神の知性は単純そのもので、無限であり、人間の知性は、ただ、その似姿 (Imago) でしかない (Idiota de mente 3 章)。

したがって、真理に関して言えば、神には厳密な意味で真理が存在するが、人間の知性には、その真理の類似しか存在しない。

このように、Cusanus は汎神論を避けるために、神と被造物の間に、原像 (Urbild) — 似像 (Abbild) の関係や無限—有限の関係をおき、とくに、「対立物の一致」の壁を設けることになるのである。

しかし、『隠れたる神』で Cusanus が示すように、人間の知性は無限なる神の超越と内在の神秘を理解することはできない。神はこの意味で、人間の有限な知性にとって隠れており、神が与える信仰の光なくしては、無限なる神を認識することは人間には不可能である。

## 結論

本書は、J. Gerson の後期哲学書を分析してその認識論を明らかにし、理性と信仰、形而上学と神学との関係を示し、同時に、この点から Cusanus のそれとの関連性を指摘したことで新しい研究とすることができるであろう。

すなわち、J. Gerson によれば、外界の経験的世界は直接認識されず、ただ、象徴を通じてのみ人間知性と関係をもつことができる。

この象徴を研究の対象とするのが形而上学である。しかし、経験的事物と象徴との間には抽象作用による一致が確立されないので、論理的世界と経験的世界は関連を失い、真理 (知性と事物の一致) は危機に立つことになる。こうして、形而上学と真理の基礎は信仰によって与えられる必要が生じ、形而上学は神秘神学と啓示に道を譲るようになるのである。このような J. Gerson の神学哲学思想が宗教改革に大きな影響を与えたのは周知の事実である。

一方 Cusanus は J. Gerson の影響をうけて、神秘神学と聖書に重きをおき、哲

学的には、カントの先駆者と呼ばれるような立場をとり「知ある無知」の認識批判を教えた。

人間の理性が活動するには、神よりの光、信仰の光が必要である。信仰と理性との一致は、Cusanus によると、特に神秘生活、倫理道德の実践などに重要であって、これは、拙論 “Die theologische und anthropologische Fundierung der Ethik bei Nikolaus von Kues” (Mitteilungen und Forschungsbeiträge der Cusanus-Gesellschaft Bd. 10) のなかに明らかに示されたところである。このような Cusanus 研究と本書とを総合するとき、中世末期の哲学が現代哲学に与えた影響が明確になってくるように思われる。